

第10回 日本医師会・日本獣医師会による連携シンポジウム

「“One Health”時代を迎えた薬剤耐性対策」開催される

令和元年11月25日(月)、日本医師会と日本獣医師会の共同主催による第10回日本医師会・日本獣医師会による連携シンポジウム「“One Health”時代を迎えた薬剤耐性対策」が、日本医師会館大講堂において、農林水産省の委託を受け、厚生労働省の後援のもと、多数の参加者を得て盛大に開催された。

まず日本医師会を代表して横倉義武会長から挨拶が行われ、続いて日本獣医師会から藏内勇夫会長の挨拶が行われた。

【日本医師会 横倉義武会長挨拶】



日本医師会・日本獣医師会による連携シンポジウム「“One Health”時代を迎えた薬剤耐性対策」の開催に当たり、日本医師会を代表してご挨拶を申し上げます。皆様方におかれましては、日頃より、感染症予防や薬剤耐性対策等、多岐にわたり多大なるご尽力をいただいております。

衷心より敬意と感謝を表する次第でございます。

さて、本日のシンポジウムは、昨年に引き続き、薬剤耐性対策をテーマに取り上げました。ご高承のとおり、近年、薬剤耐性菌が世界的に増加し、その一方で、新たな抗菌薬の開発が減少傾向にあることから、AMR対策は、国際社会における大きな課題となっております。

AMR対策につきましては、国も「薬剤耐性 (AMR) 対策アクションプラン 2016-2020」を策定し、医療機関における抗微生物薬使用量などについて、2020年までの目標値を掲げ、さまざまな取り組みを行っているところであります。

厚生労働省の薬剤耐性ワンヘルス動向調査検討会におきましては、最新の「薬剤耐性ワンヘルス動向調査報告書」のとりまとめを行っておりますが、その中では、2018年の経口抗菌薬の使用量は2013年と比較して減少傾向にあるとの報告がなされております。

一方で、耐性菌の発現状況については、まだ判断ができない状況であり、2020年の目標値の達成に向け、関係者の協力のもと、更なるAMR対策の普及とともに、現在のアクションプランの計画終了後の対応についても

検討する必要があると考えております。

日本医師会におきましては、これまでワンヘルス・アプローチの概念のもと、2013年11月に日本獣医師会との間で学術協力の推進のための協定書を締結し、一体的な感染症対策等の実施に取り組んできたところであります。

2016年11月に福岡県で開催した「第2回世界獣医師会-世界医師会“One Health”に関する国際会議」でとりまとめられた「福岡宣言」におきましては、「医師と獣医師は、抗菌剤の責任ある使用のため、協力関係を強化する」ことが盛り込まれ、具体的な取組みが求められております。

このような中、2017年6月に厚生労働省が「抗微生物薬適正使用の手引き」を公表しました。

この手引きは、医師が適正な診断に基づく抗微生物薬の処方のある方について振り返る契機となるとともに、さらなる抗微生物薬の適切な処方、使用に資するものとなることを期待されます。

こうしたシンポジウムを通じて、医師、獣医師に対しAMR対策の必要性への理解を深めるとともに、患者さんやご家族に丁寧に説明することにより、国民全体の理解を醸成していくこともわれわれに課せられた使命だと考えており、日本医師会といたしましても、関係者の更なる連携のもと、実効ある取組みを進めてまいりたい所存です。

本日は、2名の先生方よりご講演をいただき、その後、動物分野及び医療分野における薬剤耐性対策の事例紹介として10名の先生方よりご発表いただく予定であります。

本日も参加の皆様方にとりまして、本シンポジウムが実りあるものとなりますことを祈念いたしまして、挨拶とさせていただきます。

【日本獣医師会 藏内勇夫会長挨拶】

本日、日本医師会-日本獣医師会による連携シンポジウム「“One Health”時代を迎えた薬剤耐性対策」が、医師、獣医師をはじめ、多数の関係者の皆様のご参加を得て開催されることに対し、日本獣医師会を代表して心から感謝申し上げます。

近年、国境を越えた広範な地域で人と動物の共通感染症の感染拡大が懸念される中で、人と動物の健康及び環境の保全に係る関係者が連携し、感染症及び薬剤耐性



(AMR) 対策等の課題に取り組むべきであるとする“One Health”の考え方が世界的に広がっています。

日本獣医師会では、以前から“One Health”の考え方に注目し、平成25年11月に、日本医師会との間で“One Health”に基づく学術協力の推進に関する協定書を取り

交わし、また、地域の医師会-獣医師会においても同様の学術協定が締結され、今や全国すべての地域において医師と獣医師のネットワークが構築されています。

このような協定に基づき、両会は“One Health”に関連するテーマを取り上げた連携シンポジウムを開催し、医師と獣医師の情報共有の場を設けてまいりました。

今回で第10回となりますこの連携シンポジウムでは、両分野にとっての最重要課題の一つである薬剤耐性対策を取り上げました。

午前中の特別講演では、医学領域から東邦大学の館田一博先生に、獣医学領域から酪農学園大学の田村豊先生にご登壇いただきます。

また、農林水産省からの委託事業として、厚生労働省のご協力もいただき、午後のプログラムでは動物分野と医療分野のそれぞれにおける薬剤耐性対策に関する優れた取り組み事例を発表していただきます。それぞれの現場での事例紹介は、ご参会いただいた医師、獣医師の皆様には興味深いものになるものと、私も期待しているところであります。

日本獣医師会といたしましては、わが国における“One Health”の推進が、人と動物が安心して共生できる社会の構築につながることを心から期待するものであります。

最後に、本日ご来場の皆様に改めて厚くお礼申し上げますとともに、シンポジウムの開催にご協力いただいた横倉義武会長をはじめ日本医師会の皆様、また、ご支援いただきました農林水産省、厚生労働省の関係者の皆様に心から感謝申し上げます、私の挨拶といたします。

【第一部：特別講演「耐性菌の現状と今後の展望」】

第一部の特別講演では、館田一博 東邦大学教授から「医師側からの提言 — AMR時代に求められる感染症診療—」について講演が行われた後、続いて、田村豊 酪農学園大学教授から「獣医師側からの提言 — One Health時代を迎えた抗菌薬の慎重使用—」について講演が行われた。



館田一博教授
(東邦大学医学部)



田村豊教授
(酪農学園大学)

【第二部：動物分野及び医療分野における薬剤耐性対策取組事例発表】

第二部の「動物分野及び医療分野における薬剤耐性対策の事例紹介」に先立ち、神井弘之 農林水産省大臣官房審議官の挨拶が行われた。

【神井弘之 農林水産省大臣官房審議官挨拶】



本日は第10回日本医師会、日本獣医師会による連携シンポジウム「“One Health”時代を迎えた薬剤耐性対策」の開会に当たり、一言ご挨拶申し上げます。

お集まりの皆様におかれましては、日頃から農林水産行政に多大なご協力をいただきまして誠にありがとうございます。

この場を借りて御礼申し上げます。特に、獣医療関係の方々がいらっしゃると思いますが、最近は豚の伝染性疾病の発生予防、あるいはまん延防止について、皆様方のご協力がなくては一步も前に進めない対策を進めており、これについてご理解とご協力をいただいていることをあらためてお礼申し上げます。

さて、本日のテーマですが、抗菌剤が効かない細菌が引き起こす感染症の増加が国際的な脅威になっております。抗菌剤には動物と人が共通で使用しているものがあり、動物と人との共通感染症があるということで、人-動物といった垣根を超えた世界的な取組みであるワンヘルスアプローチを農林水産省でも厚生労働省とともに進めているところであり、本日のシンポジウムのタイトルにもなっているところです。政府では毎年11月を薬剤耐性対策推進月間としており、薬剤耐性に対する国民の皆さんの理解をいただくことに力を入れております。こうしたタイミングで日本医師会と日本獣医師会が共催でシンポジウムを開催されることは本当にありがたいことであると思っております。

専門性の高い日本医師会と日本獣医師会が連携することは非常に素晴らしいことです。役所、例えば農林水産省と厚生労働省の連携は縦割りとなっていると常々ご指摘をいただいております。縦割りを排して連携していくために、特に専門性の高い組織が分野を超えて連携していくために非常に重要であると私たちが言われていることは、無理に同じになるということではなく、お互いのミッションの違いや考え方の違いをしっかりと理解すること、さらに、お互いの違いをリスペクトし合い、それをもってコミュニケーションを活性化することです。本日のシンポジウムの機会は、これらのいずれの点でも素晴らしい機会であると思っています。この後、各地での優良事例が発表になると伺っておりますので、どうか参加者の皆様、各地での事例について十分に情報収集していただき、シンポジウム開催後、現場で分野を超えたワンヘルスアプローチにおいて協力していただくためのきっかけにさせていただければと思います。

最後になりますが、この素晴らしい連携の機会が活性化してワンヘルスアプローチが日本全国に広がるとともに、本日ご参加の皆様方のますますのご健勝とご発展をお祈りし、私のご挨拶といたします。

本日はよろしく願いたします。



石橋朋子調査官
(農林水産省消費・安全
局畜産安全管理課)

続いて、石橋朋子 農林水産省消費・安全局畜産安全管理課調査官が進行兼座長となり、第二部「動物分野及び医療分野における薬剤耐性対策の事例紹介」を開始した。

事例発表の内容は以下のとおり。

1. 「乳汁検査により耐性菌が出現した農場におけるテトラサイクリン系抗生物質の使用状況について」

岡部卓馬 (千葉県農業共済組合連合会
紫葉会情報技術部会)

2. 「静岡県のAMR対策 一有志チームから行政部会立ち上げまで」

倉井華子 (静岡県立静岡がん
センター感染症内科)

3. 「小動物臨床現場での状況とAMR対策について」

村田佳輝 (獣医臨床感染症研究会 VICA)

4. 「小児病院における包括的な抗微生物薬適正使用の取り組み」

福岡かほる (東京都立小児総合医療
センターASP小委員会)

5. 「鶏病研究会における取り組み」

橋本信一郎 (鶏病研究会)

6. 「養豚場における抗菌剤使用量低減への取り組み」

小川哲生 (有限会社タローファーム)

7. 「費用と時間をかけずに、県内の感染症情報共有化システムを構築する」

久保健児 (和歌山感染危機管理支援ネット
ワーク (WaICCS) 事務局)

8. 「2010～2018年に北海道十勝管内で分離された牛由来病原細菌の薬剤耐性調査」

中谷敦子 (北海道十勝家畜保健衛生所)

9. 「養豚農家におけるプラスミド性コリスチン耐性遺伝子保有大腸菌の浸潤状況調査結果を用いた薬剤耐性対策の取り組み」

吉澤頌樹 (愛媛県南予家畜保健衛生所)

10. 「兵庫県の休日夜間急病センターにおける小児に対する経口抗菌薬適正使用に向けた取り組み」

明神翔太 (Happy Trial Research Team)

また、各事例紹介の後には、「動物分野及び医療分野における現状と対策」として、川西路子 農林水産省消費・安全局畜産安全管理課課長補佐、及び上戸 賢 厚生労働省健康局結核感染症課課長補佐からそれぞれ講演が行われた。

シンポジウムの最後に境 政人日本獣医師会副会長兼専務理事から挨拶が行われた。

【日本獣医師会 境 政人副会長閉会挨拶】



本日は、第10回日本医師会・日本獣医師会による連携シンポジウム「“One Health”時代を迎えた薬剤耐性対策」におきまして、ご講演をいただいた先生方、また大変ご多用のところご出席をいただいた皆様方には、主催者を代表して厚く御礼を申し上げます。

本シンポジウムの冒頭に本会蔵内会長が申し上げましたように、人と動物の健康と環境の保全を一体的に捉えて対処する、このOne Healthの考え方のもとに、平成25年11月に日本医師会と日本獣医師会は学術連携協定を締結いたしました。これを受け、55の全国の地方獣医師会におきましても地域の医師会と同様の連携協定を締結し、全国的なOne Health実践体制が構築されました。こういった協定の下で、中央ではこれまで10回にわたって連携シンポジウムを開催し、地方でもそれぞれ医師会と獣医師会とが連携して活動が続けてきております。

一方で、薬剤耐性対策、これも医療分野と獣医療分野では連携活動が進められてきました。特に薬剤耐性の実態調査におきましては、院内感染対策サーベイランス、それから動物由来薬剤耐性菌モニタリング、この2つの調査結果を20年にわたり共有しながら連携活動を進めてまいりました。

薬剤耐性菌は、人の病院で発生したもの、畜産現場や動物病院で発生したもの、さらに農薬等を使用して環境で発生したもの、これらの薬剤耐性菌あるいはその遺伝子が相互に移行して、人と動物での抗菌薬による治療を困難にすることが懸念されております。人、動物、環境、全ての分野で連携した薬剤耐性対策への取組みが不可欠になっており、One Healthの実践というテーマには最適な課題であろうと考えております。

現在、医療分野でも獣医療分野でも全国でさまざまな取組みが行われておりますが、本日は10名の医師、獣医師の先生方にその成果を発表していただきました。明後日には、毛利 衛宇宙飛行士が議長を務めております「第4回薬剤耐性（AMR）対策推進国民啓発会議」が開催されますが、本日ご発表いただいた中から農林水産大臣賞、厚生労働大臣賞として報告されるほか、国民啓発会議議長賞、文部科学大臣賞についても報告されると承っております。

それから、午前中の特別講演で館田先生からご講演がありましたように、もう一つのOne Healthの大きな課題は、人と動物の共通感染症、人獣共通感染症です。ご

承知の通り、人の感染症の6割は動物由来と言われております。例えば、日本においても毎年100人近く患者が出て10人前後の方が亡くなっているSFTS、既に清浄化しているBSE、現在アフリカで話題になっているエボラ出血熱、世界で4千万人もの死者を出したスペイン風邪に代表される新型インフルエンザ。こういったものを考えますと、これから興ってくる新興感染症、再興感染症のほとんどが動物由来ということになってまいります。したがって、こういった課題に対応するためには、医師と獣医師、あるいは専門家が連携しながら取り組んでいかなければ解決できない課題であります。そのような人と動物の健康と命に直結する課題が山積している中で、本日のシンポジウムが、医師と獣医師の連携が進む契機になってほしいと願っております。

最後になりますが、館田先生、田村先生をはじめとしたご講演者の先生方、会場である医師会館をご提供いただいた日本医師会の横倉会長、釜范常任理事をはじめとした医師会の皆様方、種々ご指導いただきました農林水産省、厚生労働省の皆様方、さらに、長時間にわたりこのシンポジウムにご参加をいただきました皆様方に深く感謝を申し上げます。本日は誠にありがとうございました。

またシンポジウムの開催後には、会場を小講堂に移し、シンポジウムの内容をはじめとした薬剤耐性対策等に関する意見交換が行われた。

